〔学術論文〕

嘉義神社の創建について
―周辺との関わり―

About the foundation of Chiayi shrine
- involvement with neighboring area -

小野　純子

Junko ONO

Studies in Humanities and Cultures

No. 28

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷　28 号
2017 年 7 月
GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN

JULY 2017

〔学術論文〕

嘉義神社の創建について

－周辺との関わり－

About the foundation of Chiayi shrine
- involvement with neighboring area -

小野　純子
Junko ONO

はじめに
1.　日本統治下台湾の神社
　1.1　台湾における神社創建
　1.2　台湾における神社参拝と学生
2.　嘉義「街」「神社」「学校」
　2.1　嘉義神社創建の歴史と現在に至るまで
　2.2　嘉義「街」と嘉義神社
　2.3 周辺「学校」と嘉義神社
おわりに

要旨　台湾は 1895 年より約 50 年間、日本の統治下に置かれた。その間台湾では同化政策がとられ、日本人の日本語による教育などが行われた。その政策は宗教面でも取られ、日本の国家神道を植民地に根付かせようと試み、50 年間で台湾各地には多くの神社が創建された。本論は、その中でも「嘉義」に注目する。嘉義は、1920 年の地方制度改正によって、台南州に組み込まれ格下げされた街である。本論では、1920 年代の嘉義「街」と共に歩んできた嘉義神社の創建を振り返り、当時の周辺学校や学生らとの関わりについて考察した。本論により、これまで別々に論じられてきた「街」「学校」「神社」のつながりが浮き彫りとなった。

キーワード：台湾、嘉義、神社、学生、街

はじめに

本研究は、日本統治下台湾の学生と神社参拝との関係を明らかにするものである。研究の一事例として、本論では嘉義地区を取り上げ、まず嘉義神社と周辺との関係を明らかにする。

神社は、日本の伝統的な宗教である神道に基づく宗教施設である。戦前、日本の植民地建設の中で、アジアを中心に多くの神社が創建された。日本では、神社参拝が近代国家形成や臣民統合

と密接に結び付いた儀礼として明治以来存在してきた[1]。

台湾では、統治のはじめより神社の創建が行われ、1930 年代後半以降は、日中戦争の開戦に呼応する形で、同化政策の一つとして皇民化政策[2]が取られたことにより、神社の増設と参拝が強化された。皇民化における宗教上の最終目標は日本の国家神道が植民地固有の宗教に取って代わることであった[3]。神社参拝は台湾神社[4]の創建時から行われていたが、皇民化政策が始まって以後学校行事として更に熱心に行われるようになった。1937 年、日中戦争勃発以後は、寺廟整理[5]と称した台湾固有の宗教施設の廃止運動が盛んに行われるようになり、特に新竹市、彰化市、嘉義市等は積極的に取り組んでいた[6]。

本論の対象は嘉義地区である。では「嘉義」とは一体どのような地域なのだろうか。まずはその特色を述べる。嘉義地方は名勝の多い場所でもあった。『台南新報[7]』（1924 年 10 月 31 日）では、「嘉義地方の名勝」として、新高山、阿里山、嘉南大圳、呉鳳廟、関子嶺温泉、嘉義公園、北港朝天宮などが紹介された[8]。これらは、現在も台湾を象徴する場所の一つである。

1920 年まで嘉義は、台湾に 12 ほど存在した庁の一つである嘉義庁として地方拠点都市であった。ところが 1920 年の地方制度改正により台南州に組み込まれ、拠点都市の地位を失った。嘉義庁は州になることができなかった庁の中でも一番大きな街であった。嘉義廃庁以降、1930 年の嘉義市発足までは、まさに嘉義にとって暗黒の時代であった。暗黒の時代を共に歩んできたのが、本論のテーマである嘉義神社であろう。

嘉義神社は、日本の国家神道提唱の為、1915 年に創建された。長らく県社であったが終戦間際に国幣小社に列格された。台湾神社、台南神社に次ぎ、新竹神社[9]や台中神社[10]と並ぶ社格である。参拝需要の増加に合わせ、戦争末期の 1944 年には社殿の増設も行われている。日本時代後半の動きの一方、1920 年代は、神社の社司が何度も変わるなど混迷をしていた。

嘉義地区と嘉義神社は、共に 1920 年代という暗黒の時代を乗り越え 1930 年以降は、新たに嘉義市に生まれ変わり、さら周辺学校の活躍[11]などにより非常に盛り上がった。

ここで本論に関する先行研究と資料を整理する。これまで日本統治時代台湾の神社に関する研究は多数されている。蔡錦堂『日本帝国主義下台湾の宗教政策』（1994）では、統治初期の宗教政策から一街庄一社による神社創建、寺廟整理に至るまで宗教政策という観点から日本統治時代に

---

[1] 中村香代子 2008「1930 年代から 1945 年までの神社参拝についての一考察―国定国語読本における神社言説を巡って―」社学研論集 Vol. 12　32 頁。
[2] 皇民化政策は、終末期の極端な様相に過ぎない。1930 年代後半より、推し進められた。
[3] 周婉窈 2003『海行兮的年代　日本殖民統治末期臺灣史論集』允晨文化實業股份有限公司 41 頁。
[4] 1944 年台湾神宮と改称されたが、本論では台湾神社と表記する。台湾神社に関しては次章で触れるが、台湾唯一の官幣大社であり、総鎮守であった。
[5] 寺廟整理に関しては、蔡錦堂 1994『日本帝国主義下台湾の宗教政策』同成社の第 7 章寺廟整理問題が詳しい。蔡（1994）によれば、「日本の台湾統治 50 年のうち、台湾の在来信仰宗教に対してもっとも大きな過ちを犯し、そして多大な批判を受けたのは、昭和 10 年代に台湾の寺廟、神明会などを相手にした、いわゆる「寺廟整理運動」である」（蔡, 1994, 230 頁）。
[6] 小笠原省三 2004『海外神社史』ゆまに書房 183 頁。
[7] 台南新報は、台南で刊行されていた新聞である。1937 年には、『台湾日報』と改題された。
[8] 『台南新報』1924 年 10 月 31 日第 8154 号
[9] 新竹神社は、1918 年に台湾新竹に創建された神社である。社格は国幣小社であり、祭神は能久親王と開拓三神であった。
[10] 台中神社は、1912 年に台湾台中に創建された神社である。社格、祭神共に新竹神社と同様である。
[11] 周辺地域有数の進学校となった嘉義中学、更新初出場、準優勝を成し遂げた嘉義農林学校などの活躍があった。

ついて述べている。また、中島三千男（神奈川大学）らによって海外神社の跡地や台湾の各神社に関して丹念に調査されている。しかし、研究が大都市（台北、台南、高雄等）に集中しており、台北、台南、高雄等に比べ都市としての規模が一段下がるが地方の行政の中心であった新竹、台中、嘉義のような地方都市の神社は重視されることがなかった。

とはいえ嘉義は無視できない地方都市であった。先行研究もいくつかある。藤井康子「1920 年代台湾における地方有力者の政治参加の一形態―嘉義街における日台人の協力関係に注目して―」（日本台湾学会報第 9 号，2007）では、1920 年の地方制度改正から嘉義の周縁化、協議会員の選出、中学校の新設などに関して述べられている。ここで述べられている嘉義の有力者は、嘉義神社にも大きく関わっていた人物たちであり、神社の繁栄は都市計画上、街の有力な構成であるにもかかわらず嘉義神社に関しては触れられていない。また、陳鸞鳳『日治次期臺灣地區神社的空間特性』(2007）は、台湾全土の神社に関して、空間設計という点から議論し、一部、学校と神社の関係についても触れている。しかし空間に関する記述が大半であり、街と神社に関しては触れられていない。

上述の先行研究に加えて、1935 年に発行された『嘉義市制五周年記念誌』(嘉義市役所発行 1935、1985 年に黄成助成文出版社有限公司より復刻)、『台湾日日新報[12]』、『台南新報』、台湾総督府檔案、国立公文書館等の資料がある。楊仁江『原嘉義神社附屬館所調査研究』(内政部/嘉義市文化局 2004)も参考文献として一部使用したが、『嘉義市制五周年記念誌』を多く引用して書かれたものだ。『嘉義市制五周年記念誌』では、当時の嘉義神社社司が嘉義神社に関して執筆している。『台湾日日新報』と『台南新報』では、神社の例祭記事を中心に調査をした。台湾総督府檔案には、嘉義神社に関わる人物の履歴書等が残されている。国立公文書館には、嘉義神社の列格に関する資料が残されている。現在までの文献調査で得た限られた資料の中で本論を進める。

以上から、本論では第 1 章で日本統治下台湾における神社創建と参拝に関して概要的に述べ、第 2 章以降で、これまで注目されることが多くなかった地方都市、嘉義に注目する。嘉義の「街」と共に歩んでいたはずが先行研究で触れられてこなかった「嘉義神社」の創建について「街」「嘉義神社」「周辺学校」をキーワードに論じる。「街」と「学校」との関わりはすでに先行研究等で言及されているが、では「神社」と「学校」はどうであろうか。

1. 日本統治下台湾の神社

1.1 台湾における神社創建

台湾は 1895 年より約 50 年間、日本の統治下に置かれ、その間、各地に多くの神社が創建された。その数は 68 社であり、半数近くは 1930 年代以降、新たに創建されたものである。それではまず、海外神社について、以下より先行研究を参照として概要を述べる。

[12] 台湾日日新報は、日本統治時代の台湾では発行されていた新聞である・日本統治時代の台湾では最大の新聞であった。

海外神社跡地について詳しい、中島三千男『海外神社跡地の景観変容　さまざまな現在』(2013) は、海外神社について以下のように述べている。

海外神社とは

戦前、アジア地域に建てられた神社（海外神社）は、現在判明しているものだけでも 1600 余社にのぼる。海外神社には、官幣大社朝鮮神宮、同台湾神社（神宮）、同樺太神社、同南洋神社など、日本国政府により、その地域の統治のシンボルとして建てられた「政府設置（奉斎）神社」と海外に移住した日本人が厳しい生活の安穏を祈願する為に建てた「居留民設置（奉斎）神社」の 2 種類があった。1930 年代以降には海外神社は後者のものも含めて、全体として現地人の「皇民化」に大きな役割を果たした[13]。（中島, 2013, 2 頁）

さらに中島（2013）では、地域別神社、社、神祠数と、地域別・年代別海外神社数を表としてまとめているので、以下に引用し、参考とする。

表 1　地域別神社、社、神祠数

	神社						社・神祠	計
	官幣社	国幣社	県社	郷社	その他	（小計）		
台湾	2	3	8	10	45	68	116	184
樺太	1	0	7	0	120	128	0	128
関東州	1	0	0	0	11	12	0	12
朝鮮	2	8	0	0	72	82	913	995
南洋群島	1	0	0	0	26	27	0	27
満州	–	–	–	–	243	243	–	243
中華民国	–	–	–	–	51	51	–	51
計	7	11	15	10	568	611	1029	1640

表 2　地域別・年代別海外神社数

[13] 中島三千男 2013『海外神社跡地の景観変容　さまざまな現在』株式会社御茶の水書房 4 頁より引用。

	神　社								社・神祠		計
	台湾	樺太	関東州	朝鮮	南洋諸島	満洲	中華民国	（小計）	台湾	朝鮮	
1900 年まで	2	–	–	–	–	–	–	2	3	–	5
1901-1905	0	–	–	–	–	1	–	1	0	–	1
1906-1910	1	3	2	–	–	5	–	11	2	–	13
1911-1915	7	2	1	0	1	16	2	29	3	2	34
1916-1920	6	3	2	35	2	9	3	60	6	41	107
1921-1925	2	61	3	7	1	3	0	77	16	57	150
1926-1930	3	24	1	7	2	0	1	38	31	78	147
1931-1935	7	18	2	2	2	32	4	67	38	86	191
1936-1940	30	11	1	9	15	110	26	202	17	353	572
1941-1945	3	0	0	20	0	67	14	104	0	296	400
（不明）	7	6	0	2	4	0	1	20	0	0	20
計	68	128	12	82	27	243	51	611	116	913	1,640

（出典：表１、表２共に中島三千男 2013『海外神社跡地の景観変容　さまざまな現在』株式会社御茶の水書房１頁。中島（2013）によると、中島三千男「〈海外神社〉研究序説」（『歴史評論』602 号、2000 年６月）が本来の出典である。）

中島（2013）によれば、海外神社はその存在が確認されているものだけでも 1,640 社にのぼり、社・神祠[14]を含めれば、朝鮮が最も多く、次いで満州、台湾である。

表２より創立年代を見ていくと、樺太と関東州を除いては 1930 年代、特に後半に目まぐるしい勢いで神社の創建が行われている。これは、これまでの研究でも示されてきたように植民地での支配を強化するため展開された皇民化政策の一環である。1930 年代は、満州事変、日中戦争など

[14]「社」や「神祠」とは、台湾や朝鮮に制度として設けられた、簡便な神社のことである。前掲載 中島（2013） 15 頁。「社」の定義及び設置条件は、「神社には数えられないが、公衆が参拝するための神祇施設」或いは「崇敬者が 20 名以上必要」である。（赤井聡司 2004「日本統治時代の台湾における神社創建」天理カルチャー研究所第 12 号 6 頁参照。）

激動の時代であり、朝鮮や台湾の動向も非常に重視され、植民地の宗教に対しても再検討がなされた[15]。では、次に台湾における神社創建について確認する。

領有当初の台湾で創建された神社は 3 社のみである。しかし 1945 年時点では、68 社にのぼり、中には社格の高い神社も存在していた。神社のない都市では、台湾神社に対する遥拝式を挙って、参拝の代わりとしていた[16]。

台湾においては、まず 1896 年に民間信仰系神社である台中稲荷社が造営され、同年、鄭成功を祀っていた延平郡王祠が開山神社と改称された。開山神社は翌年、県社に列格したが、元来の中国風様式のまま鳥居などが新築された[17]。社格は 1897 年から 1945 年まで県社であった。何度か改築が行われており、その中で日本式の拝殿も築かれた。その後 1900 年代に入ると台湾初の官幣大社となる台湾神社が創建される。台湾神社は 1900 年台北に創建され、総鎮守として、社格も高く、特に重要視された神社である。台湾神社が創建されて以後、1930 年代後半に至るまで着々と台湾島内で神社が造営された。

1930 年代後半になると、これまでにも述べたように台湾でも皇民化政策が実施され、神社参拝が推奨され、神社創建も増加の一途をたどった。『臺灣ニ於ケル神社及宗教』（臺灣總督府文教局社會課 1935）においても以下のように述べられている。

> 近年時勢の推移につれ、島民に對する國民精神徹底の必要を痛感するに至り、神社を中心として、之が實現を期せんとするの機運が著しく高潮し來り、島内各地に續々神社建立の計畫を見るに至つたことは改隷以來特色ある現象であつて、現に新に建立許可を受け建設しつゝあるものに鳳山、岡山、北門、豐原、瑞芳、通霄、里港等があり、又その計畫の具體化しつゝあるものに汐止、旗山、茄苳、東港、北門、潮州、東石、斗六、長興、海山、新莊、淡水、北斗等がある[18]。
> 【臺灣總督府文教局社會課 1935『臺灣ニ於ケル神社及宗教』1 頁】

上記で述べられているように、国民精神の徹底の必要性から、総督府は「一街庄一社」の政策を展開し、1930 年代後半にかけ、神社が増設された。また「一街庄一社」の政策に際して、前段階として神社参拝を促すために神社造営に加えて、遙拝所の建設も行われた[19]。しかし「一街庄一社」の政策は、決して順調にはいかなかったようである。仮に「一街庄一社」として台湾全島に

---

[15] 前掲載　小笠原省三（2004）183 頁を参照。
[16]「新竹の台湾神社祭」「台中の台湾神社祭」ともに『台湾日日新報』1907 年 10 月 30 日。
[17] 黄士娟 2014「台湾の神社とその跡地について」（『海外神社跡地から見た景観と持続の変容』神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター）13 頁を参照。
[18] 臺灣總督府文教局社會課 1935『臺灣ニ於ケル神社及宗教』1 頁。
[19] 全部落に遥拝所　嘉義郡で四十七か所建設
【嘉義電話】嘉義郡では郡民に對して敬神崇祖の念を深からしめ以て日本精神の涵養を圖るため過般來關係者に於て協議を重ねた結果、既定計畫の街庄一神社建立への段階として先づ各部落民が毎日參詣する事の出來る遙拝所を派出所單位に郡下全部落に建設する事に決定し愈よ來年度豫算に一箇所の建設費一千圓乃至一千五百圓まで計上し十五年度中に郡下に四十七ヶ所の遙拝所を建設し皇民化に拍車を掛けることになつた（『台湾日日新報』1939 年 10 月 30 日第 14270 号）

新たに神社を創建した場合、その対象は 300 を超え費用の面など経済的な問題を抱えていた[20]（蔡, 1994, 135 頁）。

1945 年の終戦時には、台湾神社（官幣大社）、台南神社（官幣中社）、台中神社、新竹神社、嘉義神社（国幣小社）[21]など社格の高い神社をはじめ総数は 68 社となった。終戦までに台湾に鎮祭された神社の総計 68 社は、地方の数が 5 市、38 街、217 庄であったから、少なくとも主要な都市はほぼ総てが自らの鎮守を持つに至ったとみなすことができる[22]。

最後に、祭神について触れておく。赤井（2004）によると、「台湾で最も多く奉祀された祭神は「能久親王」（60 社）、次いで「開拓三神[23]」（41 社）である。能久親王と開拓三神はいずれも台湾の総鎮守である台湾神社の祭神であり、台湾各地の神社も大部分がこれに倣って奉祀した[24]。」（赤井, 2004, 13 頁）次章で詳しく触れるが、本論のテーマである嘉義神社の祭神も開拓三神、能久親王（加えて主祭神、天照大神）である。能久親王とは北白川宮能久親王であり、近衛師団長として台湾に派遣されたが、台南で病死した皇族である。終焉の地となった台南には後に台湾第二の社格、台南神社が創建され、主祭神として北白川宮能久親王が祀られた。『台湾日日新報』の記事を見ていくと、毎年、北白川宮能久親王の命日である 10 月 28 日[25]には台湾神社大祭をはじめ各地の神社で盛大な祭典が開かれていた。台湾神社では、毎年 10 月 28 日、台湾総督が奉幣使として参向するかたちで行われていた（青井, 2005, 286 頁）。

1.2　台湾における神社参拝と学生

神社参拝と学生に関しては、既往の研究でも神社参拝問題として論じられてきた。神社参拝問題は、1932 年上智大学の学生の「靖国神社参拝拒否事件」、植民地朝鮮や台湾のキリスト教系学校への神社参拝の要求などを例としキリスト教系の学校におけるものが議論されることが多い[26]。1930 年代の日本本土では、社会が軍国主義へ傾倒し、神社も兵士を見送る場や戦没者を慰霊する場として認識され、それを契機として神社参拝が儀礼として定着された[27]。それは皇民化政策の一つとして植民地であった朝鮮と台湾にも波及した。皇民化政策における日本神道提唱では、神社参拝が重点となり、台湾における神社参拝は小学校・公学校の定例行事であった。

まず台湾人と神社の関わりは、台湾神社の例祭への参加として、台湾神社創建時より見られた。以下に台湾神社創建当初の台湾人の参加について書かれた記事を示す。

---

[20] 蔡錦堂 1994『日本帝国主義下台湾の宗教政策』同成社 135 頁を参照。
[21] 台中神社、新竹神社、嘉義神社の社格が高かった要因の一つに、新竹市、彰化市、嘉義市等で寺廟整理が積極的に取り組まれていたことが挙げられるだろう。
[22] 青井哲人 2005『植民地神社と帝国日本』古川弘文館 81 頁
[23] 開拓三神とは、大国魂命、大己貴命、少彦名命である。札幌神社（現：北海道神宮）に祀られ、その後北海道各地へ分祀され、北海道開拓の守護神とされるようになった。北海道は台湾開拓のモデル地であり、例えば農業分野においては、札幌農学校の人材が台湾に多数流入した。神社創建においても、北海道系の神である開拓三神が祀られるようになったとみられる。
[24] 前掲載　赤井（2004）12 頁より引用。
[25] 命日は 1895 年 10 月 28 日である。
[26] 金文吉 2003「日帝統治下における神社参拝と朝鮮キリスト教」アジア・キリスト教・多元性、1：65-82 京都大学、駒込武 2005「一九三〇年代台湾・朝鮮・内地における神社参拝問題―キリスト教系学校の変質・解体をめぐる連鎖構造―」立教学院史研究第 3 号　立教大学立教学院史資料センターが詳しい。
[27] 前掲載　中村（2008）33 頁を参照。

大祭当日の概況　本島人の演武

預て定め置きたる通り圓山側の地點を相して本島人の演武をなしたるが其壯快なる殆んど筆舌のおよぶべきにあらずして其雑踏も又能く壯すべからず兎に角當日第一等の觀物と言はゞ其にて事足りなんか

【『台湾日日新報』1901 年 10 月 30 日 第 1049 号】

祭典彙聞　本島人の祭礼

▲香案　本日臺北三市街に於ける一般の本島人は各戸の軒に香案を供へ神社、御祭事初まると同等刻より式の如く最上恭拜をなして焚香供物を捧げる事に決議一定せりと

▲市街の各庄　にては一般に國旗を掲げ廟の所在地は必芝居を催す事に決定せりと

▲端艇競争　は本日十一時より明治橋付近に於て舉行し四艘の船を二手に分ち各帽子の色を異にして競争中、參觀者に一見譯り易からしむる樣旗印を樹つる由なり

▲本島芝居、演舞　本島人團体より請求により圓山公園餘興場の傍に一棟を増設したるがこの餘興場へは大龍峒及士林の俳優及其他本島人演舞に充てたるものなりと

【『台湾日日新報』1903 年 10 月 28 日 第 1649 号】

台湾における学生の神社への参拝は、台湾神社創建時から例祭時に祭典の一つとして、各学校の参拝が行われていた。学生の集団参拝では、『台湾日日新報』1905 年 10 月 28 日「本日の御祭典」中の「学生の参拝」という記事で、27 日午前の各学生の参拝人数を紹介している。うち台湾人生徒も通う学校の参拝者数は、国語学校 502 人、第一附属国語学校 470 人、大稲埕公学校 920 人、八芝蘭公学校 361 人などであった[28]。

蔡（1994）によれば、台湾人学生らの神社参拝は 1919 年には学校の法令に規定化されていた[29]。以後、神社参拝は、公学校の生徒だけに限らず、中等学校以上の各学校にも求められた。1922 年の台湾公立中学校規則が公布されると神社参拝は公立中学校において必須となり、私立中学校でも推奨されるようになった[30]。神社参拝は、学校行事としての参拝の他、写真[31]のように修学旅行へ行く際の安全祈願として行われていた。本論の対象の一つである、嘉義農林学校も内地修学旅行を実施しており、内地到着後は各地で神社参拝を行っていた[32]。

---

[28] 1905 年台湾神社における学生の参拝者数の詳細は、第二附属国語学校 160 人、第三附属国語学校 111 人、医学校 153 人、農事試験場 105 人、大龍峒公学校 153 人、枋橋公学校 155 人、山脚公学校 42 人、和尚洲公学校 156 人、錫口公学校 165 人、興直公学校 206 人、港尾公学校 280 人
【『台湾日日新報』1905 年 10 月 28 日 第 1348 号】ただし、国語学校、第一附属国語学校、第二附属国語学校、第三附属国語学校、医学校、農事試験場は公学校とは異なり日本人も通っていた。

[29] 蔡錦堂 1994『日本帝国主義下台湾の宗教政策』同成社 137 頁によれば、1919 年 4 月 10 日公学校規則は、台湾教育令の発布に従い一部の条例が改訂され、その中に台湾神社例祭日に学生らが神社参拝をするべきとの一条が加えられた。

[30] 前掲載　周(2003) 45 頁を参照。

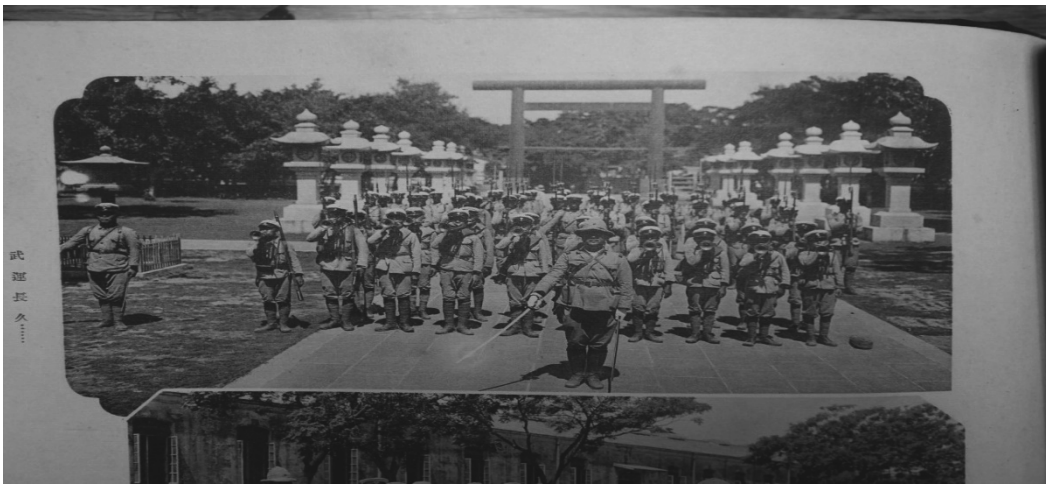
[31] 修学旅行出発前に台湾神社で旅の安全祈願。台北工業学校卒業アルバムより。

[32] 「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B04012180500、本邦学校関係雑件 第一巻(I-1-5-0-3_001)(外務省外交史料館)」

【出典：鄭麗玲 2015『躍動的青春　日治臺灣的學生生活』蔚藍文化出版股份有限公司 309 頁。】

神社崇拝は学校教育の重要な目標であり、学校では常に神社参拝、清掃、祭典への参加や地方神社の催し物以外に、知名な神社への遠足などを計画し、国家神道を学生らに深く浸透させた[33]。

ここで神社参拝に関して、本論の対象である嘉義の学生に目を向けてみる。神社参拝は嘉義神社でも行われており、嘉義における学生らの嘉義神社参拝への事例は、『台湾日日新報』1930 年 10 月 28 日付‘市内各小公学校の参拝あり’、1932 年 10 月 28 日付‘神社境内は早くから参詣人　隣接部落からの小公学校児童等も多く’1934 年 10 月 28 日付‘午前市内中等学校生徒、小公学校児童等約九千人が神社に参拝’などがあった。嘉義神社への参拝に関しては、次章で詳しく述べるが、毎年例祭の際には、日本人、台湾人ともに嘉義の学生らは嘉義神社へ参拝をしていたことが分かる。



【嘉義中学校　第七回卒業記念アルバム[34]】

[33] 陳鸞鳳 2007『日治次期臺灣地區神社的空間特性』學富文化事業有限公司　300 頁を参照。
[34] 写真は筆者が、嘉義高中（嘉義中学校の後身）での現地調査で撮影したものである。1930 年前後の卒業アルバムにあった一枚だ。場所は、周りの風景や鳥居の形などから嘉義神社ではなく、その他神社（台湾神社など）と推察される。

2.　嘉義「街」「神社」「学校」

ここでは、本論のテーマである嘉義について詳述する。近年、台湾映画『KANO』の公開以後、嘉義地区の歴史が注目されている。その映画において、野球部監督として、嘉義農林学校を甲子園準優勝に導いた近藤兵太郎と学生が初めて会った場所が「神社」であった。学生と嘉義神社の関係は果たして映画の中だけのものだったのであろうか。嘉義神社の歴史を 1920 年代の嘉義「街」から辿る。先行研究では、「街」と「学校」に関して論じられていた。本論では、「街」と「神社」、そして「神社」と「学校」について論じる。

2.1　嘉義神社創建の歴史と現在に至るまで

嘉義神社の歴史については、1935 年に発行された『嘉義市制五周年記念誌』の中で、当時、嘉義神社の社司[35]であった長束有鄰執筆の「嘉義神社並に御遺跡所に就いて」で詳しく記載されている[36]。

本論では、『嘉義市制五周年記念誌』とそれを参考にして書かれている『原嘉義神社附屬館所調査研究』、国立公文書館に所蔵されている＜県社嘉義神社ヲ国幣小社ニ昇格セラル＞、台湾総督府檔案などを参照し嘉義神社創建から終戦、現在までの概要を述べる。

嘉義神社の創建は、1911 年に立案され、翌年嘉義庁長津田毅一[37]を発起人として、伊東義路らを中心に進められた。1911 年 6 月 23 日に嘉義神社創建の第一回評議員会が開かれ、翌年 1912 年 8 月 15 日に第二回協議会が開催された[38]。そこで津田毅一より以下のように述べられた。

> 「公園内に嘉義神社を建立することは昨年来の宿題であるが今にその実現を見ないのは甚だ遺憾である。而して今や明治天皇崩御あそばされ海内の人士景仰哀痛の極、燃ゆるが如き赤誠を以て明治神宮を建設しようといふ議もあるから、我が嘉義に於てもこの際是非神社を建立して崇高無限なる明治天皇の御英霊をも祀り併せて天照大神並に台湾神社の御祭神をも奉祀して、官民之に信頼奉事し、民心の集中歸一を知らめんと思ふ」
>
> （長束有鄰「嘉義神社並に御遺跡所に就いて」『嘉義市制五周年記念誌』）

つまり、明治天皇に重きを置き明治神宮を創建する話もあり、嘉義にも神社を創建し明治天皇の御分霊を嘉義に奉祀できればということである。そこで、津田から嘉義神社建立及び寄付金募集に関する発起人として伊東義路、宇都宮讜蔵、西川利藤太、加土峯吉、林玉崑、栗本藤次郎の名が挙げられた[39]。1912 年 12 月 24 日に伊東義路他 5 名が当時の台湾総督の佐久間左馬太より 1912

---

[35] 社司とは、神社で神に仕える者で、神職、神官、神主、やしろのつかさ。今は宮司という。
[36] 楊仁江 2004『原嘉義神社附屬館所調査研究』内政部/嘉義市文化局　33 頁。
[37] 津田毅一は呉鳳廟にかかわる人物であり、宗教面から台湾統治を考えていた。
[38] 嘉義市役所発行 1985『嘉義市制五周年記念誌』成文出版社有限公司（黄成助（1985）成文出版社有限公司により復刻）　13 頁。
[39] 前掲載　嘉義市役所（1935）13 頁。

年 11 月 22 日付けで造営の許可を得た。神社は、嘉義東区、嘉義市山子頂、嘉義公園の東に、阿里山の檜材を用いて創られた。その設計は、名古屋の宮大工であった伊藤満作に任され、1915 年 10 月 28 日、北白川能久親王の薨去日に鎮座祭が執り行われた。台湾の多くの神社同様、台湾神社から分祀されたものである。初代嘉義神社社司には、田邊三亮が任ぜられた[40]。創建当初は、無社格であったが、1917 年 10 月 23 日に開山神社と同じ県社へ列格された。1920 年、台湾における行政区分が変更され、嘉義が台南州の管轄下に置かれたことにより氏子の信仰区域が拡大し、氏子の総数は、新竹州の氏子総数を超えた。しかし、1920 年代は嘉義神社にとって、神社の長であった社司が変わるなど、混迷の時期である。1926 年 6 月、初代社司であった田邊三亮が、自身の高齢と衰弱により退職を願いでたことで、当時台北稲荷神社社掌であった丹治廣行が新たな社司に任ぜられた[41]。しかしその丹治は、わずか 3 ヵ月で、本人から神経衰弱病の診断書が提出され、退職となった[42]。その後、隈元多市郎が 1932 年まで社司を務めた[43]。1932 年からは、長束有鄰が社司となり終戦までその役を務めた。

1937 年、嘉義神社は創建から 20 年が経ち、白蟻被害と腐朽が問題となっていた。加えて皇民化運動により更に氏子信仰区域が拡大し、参拝者増加を推し進める必要もあったことから、社殿とその他施設の改築と神域の拡張、参道の設置を行った[44]。『原嘉義神社附屬館所調査研究』によれば、1941 年までの正式参拝は 93 件、神前結婚 89 件、初詣及びその他 355 件であり、一般参拝の日本人は 336,069 人、本島人及びその他は 328,426 人の合計 664,495 人であった（楊,2004,49 頁）。国幣小社の列格申請書では、1942 年までの正式参拝は 103 件、一般参拝者は、687,700 人余りに達し、維持経費など予算面でも創建当初に比べ改善されていると記載されている。以後、創建以来、文化面での皇民化に奮起し、戦争勃発以後は神社参拝の風潮も高まっており、また南進の拠点として台湾人への神社崇拝を盛り上げるためなどの理由から社司長束有鄰、氏子総代早川直義が国幣小社への列格を要求している[45]。そして 1944 年には、台中神社と新竹神社と同じく国幣小社へと社格をあげた。これにより、日本統治時代台湾で創建された社格国幣小社の一つとなった。

---

[40] 「嘉義神社神職補職（田邊三亮）」（1915 年 10 月 1 日）、（『大正四年臺灣總督府公文類纂總目録永久保存第三十四巻』第 10 文書、『台湾總督府檔案』國史館台湾文献館、第 2743 冊）

[41] 「縣社嘉義神社社司退職ノ件」（1926 年 6 月 1 日）、（『昭和元年臺灣總督府公文類纂總目録永久保存第二十五巻』第 20 文書、『台湾總督府檔案』國史館台湾文献館、第 4039 冊）。

[42] 「縣社嘉義神社社司退職ノ件」（1926 年 9 月 01 日）、（『昭和元年臺灣總督府公文類纂總目録永久保存第二十五巻』第 21 文書、『台湾總督府檔案』國史館台湾文献館、第 4039 冊）

[43] 台湾総督府職員録系統　2017 年 5 月 24 日閲覧。
http://who.ith.sinica.edu.tw/s2g.action?viewer.q_authStr=1&viewer.q_dtdIdStr=000088&viewer.q_fieldStr=allIndex&viewer.q_opStr=&viewer.q_valueStr=%E5%98%89%E7%BE%A9%E7%A5%9E%E7%A4%BE&pager.objectsPerPage=25&viewer.q_dtdId=000088&viewer.q_viewMode=ListPage&pager.whichPage=1

[44] 前掲載 楊（2004）49 頁を参照。

[45] JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A03010213300、県社嘉義神社（台南州嘉義市山子頂二百五十番地鎮座）ヲ国幣小社ニ昇格セラル・公文類聚・第 68 編・昭和 19 年・（国立公文書館所蔵）を参照。

【出典：謝森展,松本曉美 1990『台灣懷舊 1895-1945 Taiwan Revisited』243 頁。】

【出典：謝森展,松本曉美 1990『台灣懷舊 1895-1945 Taiwan Revisited』243 頁。】

戦後は、神社本殿は改築され忠烈祠として使用され、のちに 828 軍病院として 1987 年に嘉義市政府に返還されるまで使用された。1990 年代前半には、老朽化による改築が行われ、嘉義市史蹟資料館となった。しかし 1994 年 4 月 24 日、火災が起こり、嘉義神社の本殿は檜木の木造建築だったため全焼した。その後、現在の嘉義市のランドマークとされる射日塔[46]が建築され、1998 年には、神職などが心身を清めるためにこもる建物であった齋館と社務所が嘉義市市定古跡となり、新たに嘉義市史蹟資料館[47]として 2001 年に生まれ変わった[48]。火災により、本殿が全焼してしまった嘉義神社ではあるが、現在も一部当時の形を残し、嘉義公園内に現存している。

【嘉義公園内嘉義市忠烈祠 2016 年 10 月 15 日筆者撮影①[49]】

[46] 射日塔は、阿里山の千年神木をモデルにつくられた高さ 62 メートルのタワーである。射日塔の名前の由来は、原住民の「射日神話」によるものである。
[47] 現在、一般開放されており無料で見学が可能である。中には、嘉義の歴史をはじめ多くの展示物がある。
嘉義市史蹟資料館ＨＰhttp://www.cabcy.gov.tw/historical/Exhibition.aspx2017 年 4 月 20 日閲覧。
[48] 前掲載 楊（2004）53 頁を参照。
[49] 奥に見えるタワーが射日塔である。

【嘉義公園内嘉義市忠烈祠/第一代嘉義神社跡 2016 年 10 月 15 日筆者撮影②】

【嘉義公園内嘉義市忠烈祠 2016 年 10 月 15 日筆者撮影③】

祭神は、天照大神、大国魂命、大己貴命、少彦名命、能久親王を一座としている。正面に天照大神、左に開拓三神、右に能久親王の御三座五柱の神が奉祀された[50]。能久親王は、台湾島内 68 社のうち 60 社が祭神として祀っていたが、『嘉義市制五周年記念誌』に、創建計画の中で「（能久親王にとって）嘉義は近衛師団として最後の戦闘であって、殿下が最も永く御指揮をとられた…略」とあるように、執筆者の長束をはじめ嘉義神社の関係者は能久親王への思い入れが強かったようだ[51]。

嘉義神社の例祭日は台湾神社大祭に合わせ 10 月 28 日であり、その他は、地方色(嘉義の特色)は出ておらず、他地域の能久親王を祀っている神社と同様である[52]。

台湾全島で 10 月 28 日に行われる祭典は、数日前から新聞で取り上げられ、当日は催し物や参拝などが盛大に行われた。嘉義神社でも、参拝、神輿奉納式、神輿行列、相撲大会、大弓、野球大会、紙芝居など余興が大々的に行われた。

2.2　嘉義「街」と嘉義神社

やまだ（2002）によれば、植民地台湾の地方制度は、1895 年から 1901 年 11 月までの試行錯誤時代、1901 年 11 月から 1920 年 8 月までの庁制時代、1920 年 9 月から 1945 年までの州制および市街庄制時代の 3 時代に区分される[53]。1909 年に台北庁、宜蘭庁、桃園庁、新竹庁、台中庁、南投庁、嘉義庁、台南庁、阿緱庁、台東庁、花蓮港庁、澎湖庁の 12 庁に整理された[54]が、1920 年に地方制度の改正が行われ、12 庁から 5 州 2 庁へと改められた。地方制度の改正により 1920 年代以降は、嘉義においてまさに暗黒の時代が始まる。地方制度が改正され、嘉義は、12 庁制の庁所在地であったが、台南州に組み込まれることになった（藤井，2007，46 頁）。それまでは嘉義庁がおかれ、地方の中心であったが、改革によりその位は引き下げられた。特色といえば、阿里山林業のみであり、嘉義市が発足される 1930 年までは特に伸びのない都市として停滞してしまった。改正後は、不満を抱いた有力者らによって置州運動が展開された[55]。

嘉義州抹殺の理由に関しては、藤井（2007）49 頁に詳述されている。抹消理由の大きなところは、日本政府から州の数を制限されたのと「南進」との兼ね合いにあるようだ。12 庁制から 5 州 2 庁制となり、台南だけでなく高雄にも置州する兼ね合いから台北と台中の間の新竹が一州として残された結果、嘉義州は抹消された（藤井,2007,49 頁）。州になることができなかった庁の中で最大規模であったのが嘉義だ。

藤井（2007）では、1920 年の地方制度改正によって起きた嘉義街の置州運動から、有力者の協

---

[50] 前掲載　嘉義市役所（1935）13 頁。
[51] 「嘉義神社並に御遺跡所に就いて」四、嘉義市における能久親王の御遺跡、前掲載　嘉義市役所（1935）43 頁。
[52] 中研院民族所數位典藏によれば、1923 年に創建された官幣中社台南神社の例祭日は嘉義神社とすべて一致している。
[53] やまだあつし 2002「1910 年代台湾の地方農政―米種改良事業を中心として」名古屋市立大学『人間文化紀要』第 13 号 2 頁。地方行政制度の変革過程に関しては、傅奕銘 2001「戦前台湾における地方制度」（『現代台湾研究』第 22 号）96 頁、表 1 地方官官制の変革過程に詳しい。
[54] 前掲載　やまだ（2002）3 頁参照。
[55] 松金ゆうこ 2002「植民地台湾における観光地形成の一要因―嘉義市振興策としての阿里山観光―」（『現代台湾研究』第 22 号）113 頁参照。松金(2002)では、嘉義市の振興政策について観光、特に阿里山に関して論じられている。しかし同嘉義市の嘉義神社については触れられていない。

議会員選出、繁栄策の請願、中学校の新設に関して述べられている。これら置州運動、協議会、繁栄策などの一連の動きが足がかりとなり、新たに嘉義中学校が設立されたようだ。しかし、藤井（2007）では、地方、地元振興を掲げたはずの一連の動きの中で「神社」が蚊帳の外にあり、触れられていない。例えば、台南州協議会員で嘉義町に居住していた会員や、嘉義街協議会員に選出された会員一覧の中で、伊東義路、西川利藤太、林玉崑などは嘉義神社創建の発起人であり、真木勝太や早川直義は後の氏子総代である[56]。このように、嘉義街で有力者とされる人物らは、当然、嘉義神社の運営にも大きく関わっていた。

地方制度改革は少なからず、嘉義神社にも影響をしていた。先に述べたように、嘉義神社の歴史の中で述べるが、嘉義が台南州の管轄下に置かれたことにより氏子の信仰区域が拡大し、氏子の総数は、新竹州の氏子総数を超えていた。しかし嘉義神社は、後に同格となる新竹神社や台中神社と比べて冷遇をされていたことが『台南新報』の記事から分かる。1924 年の台南新報によれば、10 月の例祭の際に、新竹神社へは「知事」が参拝し、嘉義神社へは「内務部長」が参拝していた。翌 1925 年 10 月例祭の際に、台中神社及び新竹神社へは「知事」が参拝し、嘉義神社へは「内務部長」が参拝していた。更に翌年の 1926 年にも台中神社へは「知事」が参拝し、嘉義神社には「内務部長」や「地方課長」が参拝していた[57]。

2.3　周辺「学校」と嘉義神社

1920 年代、嘉義の街は地方制度改正により、伸びしろのない期間が続き、同時期、嘉義神社も街の歩みも同じように混迷していた。1930 年代に入ると嘉義市が発足され、嘉義神社には終戦まで長期に渡りその任を務めることになった新たな社司が補職され、周辺では 2 つ存在した中等学校（嘉義農林学校、嘉義中学校）が切磋琢磨し、特にスポーツ（野球）で活躍し、注目を集めるなど、嘉義は盛り返しを見せていた。

まずは、周辺 2 校に関して触れる。嘉義農林学校とは、現在の国立嘉義大学の前身であり、その略称が嘉農である。嘉義農林学校は、1919 年に台湾人の中等教育の拡充を図って誕生した農林学校である。その後、地方制度改正により 1921 年に台南州立嘉義農林学校と改称された。嘉義農林学校は、日本人が台湾人を育て、嘉南大圳と阿里山林場[58]の開発に従事させるための学校であり、台湾全土の農業学校の先駆となり、台湾の農業に貢献した[59]。実業教育での台湾人の学校としてはここが長らく唯一無二の存在であり、限られた中で重要な進路かつ拠点校であった[60]。

嘉義中学校とは、現在の国立嘉義高級中学（嘉義高中）の前身である。1920 年の地方制度改正

---

[56] 藤井康子 2007「1920 年代台湾における地方有力者の政治参加の一形態―嘉義街における日台陣の協力関係に着目して―」日本台湾学会報第九号 53 頁参照。

[57] 『台南新報』1924 年 10 月 29 日。1925 年 10 月 29 日、1926 年 10 月 29 日（国立台湾歴史博物館、台南市立図書館共同出版、2009）

[58] 嘉南大圳とは、1930 年に竣工した当時台湾最大の農水施設であり、重要な水利工事の一つである。これにより、嘉南平原は台湾最大の穀物地帯となった。統治時代、阿里山は台湾でも屈指の林場であった。統治時代に台湾の林業を開発するため、阿里山に森林鉄道が完成した。鉄道の完成後、阿里山では林業の開発が盛んになった。

[59] 前掲　李明仁 吳愼德（2009）230 頁。

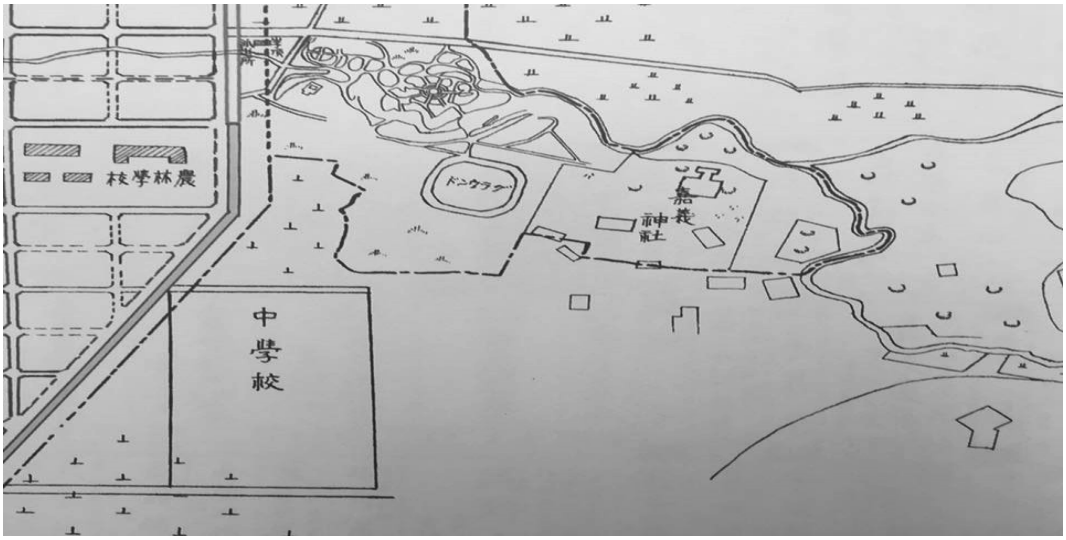
[60] 嘉義農林学校より上級の農林業教育機関として、高等農林学校（後の台北帝国大学農林専門部）や台北帝国大学理農学部があったが、台湾人の入学枠は定員の 5%程度、すなわち 1 学年に 2～3 名ずつに過ぎなかった。

後、嘉義街で起こった置州運動、協議会などの結果、1924 年に台南州立嘉義中学校として設立された。州庁所在地以外に設けられた最初の中学校であった[61]。嘉義市東区に設立され、現在も同じ位置である。嘉義中学校は、周辺地区有数の進学校であり、台湾人学生が一定数はいたが嘉義農林学校とは異なり日本人が多い学校であった[62]。嘉義中学校の学生は、嘉義地区の小公学校出身者が多く、嘉義地区の人々のための中等教育機関の一つであった[63]。

嘉義農林学校と嘉義中学校は一緒にされることや比較されることも多かった。映画「KANO」の中でもその争いは描かれていた[64]。また、終戦間際の学生動員では、2 校の学生が一緒に召集された例も存在した。では、以下より、嘉義神社と周辺 2 校の関わりについてまとめる。

① 位置

ほぼ同時期に創られた嘉義神社と嘉義農林学校、嘉義中学校であるが、その位置にも注目したい。嘉義神社は、嘉義市東区山子頂に造営され、嘉義農林学校、嘉義中学校も同じく東区に設立された。以下は 1933 年の嘉義市区計画平面図の一部である。



（出典：黄武達 2006『日治時期臺灣都市發展地圖集』南天書局 國史館臺灣文獻館　52-7 嘉義より。1933 年、縮尺 1/6000 平面図）

上の平面図から分かるように、嘉義神社と嘉義農林学校そして嘉義中学校（図面上の中学校は嘉義中学校である）は、嘉義神社に隣接する形で設立されていた。現在、嘉義農林学校の位置には、嘉義高商があり、それは嘉義神社がある嘉義公園の入り口にほぼ隣接している。また、平面図上、神社の横にある嘉義公園内「グラウンド」は現在の嘉義市棒球場であり、以前は、学校の練習グ

[61] 前掲載　藤井（2007）62 頁。
[62] 1924 年 66 人、台湾人 47 人、1925 年日本人 51 人、台湾人 43 人、1926 年日本人 59 人、台湾人 37 人と凡そ 6 割が日本人であった。藤井康子 2007「1920 年代台湾における地方有力者の政治参加の一形態－嘉義街における日台人の協力関係に着目して－」日本台湾学会報第九号　57 頁より引用。
[63] 森長整 1935「嘉義を語る」前掲載　嘉義市役所（1935）27 頁。
[64] 映画の中では、嘉農（KANO）、嘉中（KACHU）の２校の映画館での喧嘩シーン、野球の試合のシーンなど 2 校を比較する描写が度々描かれていた、

ラウンドとして使用されていた。

② 嘉義神社社司長束有鄰

長束有鄰は、先の章で示した『嘉義市制五周年記念誌』、「嘉義神社並に御遺跡所に就いて」の執筆者で嘉義神社の社司を務めていた。長束有鄰は、1932 年の辞令を以って、県社嘉義神社の社司となった。1932 年 5 月、当時の社司であった隈元多市郎が病気で退職したため、嘉義神社氏子総代真木勝太[65]他 4 名により長束有鄰が推薦された。真木らが当時の台湾総督南弘にあてた文書によれば、その推薦理由は、有資格者であり、多年嘉義農林学校の教諭として性行温良、人格者であったことだ。長束有鄰は、神宮皇学館本科を卒業後、日本本土で中学校の教諭などを経て、1916 年熊本県立球磨農業学校の教諭となり、1921 年より嘉義農林学校での勤務を命じられた[66]。これは、1919 年から 1926 年まで嘉義農林学校の校長であった柳川鑑蔵[67]により招聘されたものであろう。その後、1932 年 6 月台湾総督府社司社掌試験院長より社司として認められ、1944 年の国幣小社列格の際にも名前が記載されているので、1945 年の終戦まで嘉義神社社司を務めたと推察される。

長束は、嘉義神社の社司として、官幣大社台湾神社や官幣中社台南神社の社司らとともに敬神教化指導者講習会講師を何度か命じられることもあった。また、嘉義神社の社司だけではなく、嘉義周辺の東石神社[68]や新営神社[69]の社掌も兼任した。

③ 10 月 28 日祭典余興と学校、学生

これまでに述べたように毎年 10 月 28 日には台湾全島で祭典が行われ、当日は催し物や参拝などが盛大に行われた。嘉義神社でも、参拝、神輿奉納式、神輿行列、相撲大会、大弓、野球大会、紙芝居など余興が大々的に行われた。嘉義神社と台湾人の関わりは、創建始めからあった。1918 年の嘉義神社大祭では、神輿渡御と拝礼の際に、内地人の代表に加えて台湾人の代表も参加した[70]。

ここでは、嘉義農林学校や嘉義中学校について、『台湾日日新報』と『台南新報』の「嘉義神社」に関する記事を追っていく[71]。

【台湾日日新報】

各地の祭典　嘉義

…略…その他神社境内及び公園内に於ける奉納相撲、自転車競走並に農林学校コートに於ける奉納庭球試合等夫々人氣を呼び大盛況…略…

---

[65] 真木勝太は、1920 年に嘉義街長に任命された人物である。

[66] http://ds3.th.gov.tw/DS3/app000/list_pic1.php?ID1=00010233110&t=S&v=0605　2016 年 11 月 15 日閲覧。「長束有鄰（縣社嘉義神社社司ニ補ス）」（1932 年 6 月 1 日）、（『 昭和七年四月至六月判任官以下進退原議』、第 110 文書、『台灣總督府檔案』國史館臺灣文獻館、第 10233 冊）

[67] 柳川鑑蔵は、1919 年 5 月に熊本県立球磨農業学校から嘉義農林学校に迎えられ 1926 年 4 月まで同校の校長を務めた。後に台北州立宜蘭農林学校の校長を務める。開拓のモデルであった北海道、札幌農学校出身である。

[68] 現在の朴子芸術公園（嘉義兼朴子市）

[69] 現在の台南市新営。嘉義県と台南の境に近い。

[70] 『台湾日日新報』1918 年 10 月 29 日　第 6594 号。

[71] 本論においては、『台湾日日新報』を 1916 年-1943 年まで 10 月 28 日前後の記事を中心に調査した。

（→神社の祭典の際、嘉義農林学校の施設を使用していた。テニスは翌年以降も催し物として行われており、嘉義農林学校の施設を使用していたと推察される。）

【1928 年 10 月 29 日　第 10246 号】

嘉義神社祭典　餘興のかず多く

△二十八日

一、野球　午前十時より嘉農倶樂部對嘉悦、午後二時より嘉農對大林團、何れも公園球場に於て

【1933 年 10 月 27 日　第 10255 号】

はやくも祭典氣分溢る　嘉義神社の祭典

△野球試合（公園グランド）、二十八日午前少年野球（小學校對東門公）、午後嘉中クラブ對嘉農クラブ

【1934 年 10 月 26 日　第 12417 号】

【台南新報】

嘉義御通過車窓から叮重なる御會釋

北白川宮大妃殿下には御南下の御途次二十九日午後三時十七分嘉義駅御通過遊ばさるゝといふので、三時前より駅東側のプラットホームには…略…西側には小公學校中等學校生徒並に在郷軍人整列御到着を待つ…

【1926 年 10 月 30 日　第 8883 号】

嘉義神社祭神輿市街渡御　奉納催物ご餘興

一、陸上競技　午前九時中学校

【1930 年 10 月 27 日　第 10335 号】

上記のように、嘉義神社で祭典が行われた際に嘉義農林学校の施設を使用した例や学生が余興の一つである野球試合に参加していた例があった。

④　嘉義神社祭典と学生参拝

嘉義における学生らの嘉義神社への参拝事例は、『台湾日日新報』1930 年 10 月 28 日付‘市内各小公学校の参拝あり’、1932 年 10 月 28 日付‘神社境内は早くから参詣人　隣接部落からの小公学校児童等も多く’など、小学校や公学校の生徒の参拝の記録の他、以下、中等学校生徒（嘉義農林学校、嘉義中学校）の参拝記録も見られた。

非常時と敬神　全島にお祭氣分横溢

嘉義

嘉義神社秋季大祭は二十七日夜中央噴水御旅所に於て賑かなる青祭りと、…略…嘉義中學、農林、高女生徒の参拝あり…略。

【『台南新報』1933 年 10 月 29 日　第 11423 号】

賑やなか嘉義の祭典【嘉義電話】

嘉義神社秋季大祭の二十七日は朝から秋晴の好天…略…午前市内中等學校生徒、小公學校自児童約九千が神社に参拝…略。

【『台湾日日新報』1934 年 10 月 28 日】

嘉義市賑ふ参拝者多數　奉納催物華やかに～～【嘉義電話】

…略…午前九時より長束社司を祭主として大祭は執行され、…略…十時よりは各學校生徒一般市民の参列引きも切らず…略。

【『台南新報』1936 年 10 月 28 日】

以上①～④から、嘉義農林学校及び嘉義中学校は、嘉義神社に隣接する形で設立され、公園内のグラウンドを使用[72]していたということは、日常的に神社が学校や学生にとって身近な存在であった可能性も高い。台湾全島神社における一番の祭典が行われる際には、余興などにも参加をしていた。また、1930 年代に入ると大祭時の学生らの参拝に関する記事も出てきた。特に注目すべき点は、1932 年以降、嘉義農林学校の教諭であった長束有鄰が嘉義神社の社司に任命されたことであろう。本論までに、長束と学生、神社を結びつけるような資料を提示はできなかった。しかし社司という顔だけではなく、教育者であった一面や敬神教化指導者講習会講師を務めていたことなどから、学校と神社の関係はより密接になったことが推測できる。

おわりに

日本統治時代の台湾では、宗教の変革を試みた「神社創建・参拝」が推し進められ、特に 1930 年代後半以降は、皇民化政策の一環として強調された。台湾全島で神社が新たに造営され、一般市民の神社参拝や学生らの神社参拝が必須となった。

嘉義では、1915 年に嘉義神社が創建され、1919 年に嘉義農林学校、さらに 1924 年に嘉義中学校と相次いで神社の周辺に中等学校が設立された。1930 年代には、嘉義農林学校の教諭が社司に推薦され、その嘉義神社の中でも重要な長を任された。更に、嘉義神社は国民精神の高揚と神社

[72] 1930 年代以降の嘉義市は、嘉義農林学校が甲子園で準優勝するなど、学生のスポーツも盛んであった。

崇拝を盛り上げるため国幣小社へと社格をあげた。このような経緯から嘉義神社と周辺学校は、嘉義神社が嘉義の中等学校の学生に向けて国家神道を強化する目的があったと考えられる。学生に対する神社崇拝の推奨のため、神社と学校は同じ区画内に建てられることは珍しくないため、嘉義神社と周辺 2 校が隣接して建てられたことは嘉義の特色とは言えないが、そこで神社の重要人物であった社司を嘉義農林学校の教諭が務めたということは、統治上様々な面で大きな意味があったと言える。

本論では、日本統治下台湾の神社創建、神社参拝に関して概要的に述べ、台湾嘉義地区を対象として、「街」、「神社」「学校」をキーワードに神社の創建とその後の学校、学生との関わりについて述べた。これは、日本統治下台湾で学生と神社参拝との関係を明らかにする研究の第一段階で一助となるものであった。

日本統治下の嘉義に関する研究では、1920 年以降に注目されることが多い。1920 年、台湾では地方制度改正が実施された。当時、同格であり、同様に地方の拠点都市であった新竹や台中は州（新竹や台中にはそれぞれ、嘉義神社と同格の国幣小社新竹神社、台中神社もあり、新竹―台中―嘉義が地方拠点の都市であった）となったが、嘉義は台南州へと組み込まれてしまった。その影響は街だけではなく神社にも及んだ。しかし、これまでの先行研究では、嘉義の地方制度改正や学校新設に関して指摘していたが、「街」と共に歩んできたはずであり、街の有力構成の一つであろう「神社」に関して触れられることはなかった。

嘉義神社は、嘉義の有力者らが発起人となり 1915 年に創建され、以後 1920 年代前半までは安定していたが、1920 年代後半に入ると、神社の長である社司が入れ替わるなど、街と同様に混迷していた。更に、「街」と「神社」は 1930 年代に入ると、嘉義市の発足や終戦まで社司を務める長束が登場するなど、同じ歩みで回復を見せる。そしてその 1930 年代は、嘉義の中等学校が甲子園で活躍し、一躍有名になるなど、街の活性化の重要な役割となった。本論で、「神社」と「学校」に特に注目したことで、これまで取り上げられて来なかった嘉義の「街」―「学校」―「神社」のつながりが浮き彫りになった。

1920 年の嘉義廃庁以後、揮わず停滞した嘉義の街、1920 年代以降、初代社司が退職し、何度も社司が入れ替わるなど混迷していた嘉義神社、両者に「学校」が加わることで、盛り上がりを見せたことは間違いないだろう。

日本による 50 年間の統治の中で、学生と神社の関係は、台湾人全体への神社崇拝を推し進めるための一つの方法であった。とりわけ 1940 年以降は、日本が動員体制を整えるため、台湾人に対して人的資源の補充を進め、その補充の中心が学生らとなっていた。しかし「嘉義」においては、台湾の他の地域とは異なり、街が暗黒の時代から抜け出すその一つの道が嘉義神社であり、学校であったであろう。嘉義神社の事例が同時代、他地域の「街」―「神社」―「学校」のつながりの解明の手掛かりとなり得るだろう。今後は、本論を基に、実際の終戦間際に動員された学生と神社の関係、学生に与えた影響、役割に関して継続して調査する。

参考文献

日本語文献

赤井聡司 2004「日本統治時代の台湾における神社創建」天理カルチャー研究所第 12 号

青井哲人 2005『植民地神社と帝国日本』古川弘文館

小笠原省三 2004『海外神社史』ゆまに書房

黄士娟 2014「台湾の神社とその跡地について」(『海外神社跡地から見た景観と持続の変容』神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター)

蔡錦堂 1994『日本帝国主義下台湾の宗教政策』同成社

JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A03010213300、県社嘉義神社（台南州嘉義市山子頂二百五十番地鎮座）ヲ国幣小社ニ昇格セラル・公文類聚・第 68 編・昭和 19 年・(国立公文書館所蔵)

JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B04012180500、本邦学校関係雑件 第一巻(I-1-5-0-3_001)(外務省外交史料館)

『台湾日日新報』

傳奕銘 2001「戦前台湾における地方制度」『現代台湾研究』第 22 号

中島三千男 2013『海外神社跡地の景観変容　さまざまな現在』株式会社御茶の水書房

中村香代子 2008「1930 年代から 1945 年までの神社参拝についての一考察―国定国語読本における神社言説を巡って―」社学研論集 Vol.12

藤井康子 2007「1920 年代台湾における地方有力者の政治参加の一形態－嘉義街における日台人の協力関係に着目して－」日本台湾学会報第九号

松金ゆうこ 2002「植民地台湾における観光地形成の一要因―嘉義市振興策としての阿里山観光―」『現代台湾研究』第 22 号

やまだあつし 2002「1910 年代台湾の地方農政―米種改良事業を中心として」名古屋市立大学『人文社会学部研究紀要』第 13 号

中国語文献

嘉義市役所発行　1935『嘉義市制五周年記念誌』(黄成助 1985 成文出版社有限公司　復刻)

謝濟全 2009『山子頂上的草根小紳士 日治時期嘉義農林學校之發展』 稲郷出版

周婉窈 2003『海行兮的年代　日本殖民統治末期臺灣史論集』允晨文化實業股份有限公司

台湾総督府職員録系統（http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action）

臺灣總督府文教局社會課 1935『臺灣ニ於ケル神社及宗教』

『台灣總督府檔案』國史館臺灣文獻館

中研院民族所數位典藏（http://www.ianthro.tw/term_of_use）

陳鸞鳳 2007『日治次期臺灣地區神社的空間特性』學富文化事業有限公司

鄭麗玲 2015『躍動的青春　日治臺灣的學生生活』蔚藍文化出版股份有限公司

楊仁江 2004『原嘉義神社附屬館所調査研究』内政部/嘉義市文化局

李明仁 吳愼德 2009『椰影・金穗・野球情』國立嘉義大學 98 年度校慶暨嘉農創校 90 年記念特刊』國立嘉義大學校友會